

八世紀の「蝦夷」認識とその変遷

武廣亮平

Cognition of "Emishi" in the Eighth Century and its Change

はじめに

- ①「蝦夷」認識の成立とその実態
 - ②律令における「蝦夷」認識
 - ③八世紀前半の「蝦夷」政策とその認識
 - ④「俘囚」身分の成立と境界認識
 - ⑤「蝦夷」政策の転換と認識の変化
 - ⑥陸奥国における「蝦夷」認識の固定化
- 九世紀への展望

【論文要旨】

八世紀に成立した日本の律令国家は、列島内における未服属集団である「蝦夷」を夷狄身分として位置付け、また現在残されている史料も「蝦夷」をこのような理念的な立場から捉えているものが多い。しかしその一方で「蝦夷」という人間集団に対する認識も一定であったとは考えられず、国家によって実際に行なわれる「蝦夷」政策とその展開の中で、「蝦夷」認識も変化していったと思われる。

本論文は八世紀における「蝦夷」認識の変遷を、陸奥国を中心に考察したものである。律令において「蝦夷」は身分的には夷狄・化外人として設定されながらも、最初には百姓身分への上昇も想定された存在であった。大宝令段階では「蝦夷」支配の基本政策は「撫慰」であるが、これは「蝦夷」の百姓化を目的としたものであったと思われる。八世紀の前半はこの「撫慰」（招慰）による百姓化政策が展開されたが、それに対する「蝦夷」社会の抵抗（養老四年・神亀元年）が百姓化の限界を認識させ、それは「蝦夷」＝異質な集団という認識として神亀年間に「俘囚」身分の創出と「近夷

郡」（黒川以北十郡）の成立という形で具体化する。この二つの認識は九世紀まで続くものであり、その意味では「蝦夷」認識の基本的な成立はこの時期に求められるともいえる。天平宝字年間から行なわれる新たな「蝦夷」政策は、このような認識を前提として行なわれ、この時期の支配政策として展開されるのが「饗給」であると考えられる。従来撫慰＝饗給という理解が一般的であったが、律令国家の「蝦夷」認識とその変化という観点からみても両者は明らかに次元の異なる政策である。さらに「蝦夷」の包摂の論理として「王民」という概念も用いられるようになり、「蝦夷」は理念的には王民化されるべき存在となる。しかしこの政策も「蝦夷」社会を内国化（百姓化）することはできず、逆に境界的地域であった黒川以北十郡において「蝦夷」社会を差別化する動きが「俘囚」の王民化（宝亀元年）という形で現れる。現地における「蝦夷」社会の差別化は、律令国家の「蝦夷」認識も固定化させるのである。

はじめに

今日の「蝦夷」^①研究は、「蝦夷」が律令国家の支配理念に基づいて設定された観念的な身分集団であるとしながらも、その集団の実態についても国家を構成する人間集団とは異質のものとする理解がほぼ共通する認識となつている。そこでは律令国家側に「蝦夷」に対する異質集団としての認識が明確に存在していたという点が常にその前提としてあるのだが、現在知られている「蝦夷」に関する史料は、そのほとんどすべてが律令国家の中央政府の認識として書かれていることから、当然そこに描かれた「蝦夷」像もその実態をどの程度把握した上での認識であるのかという点が解明されなければならない。さらにその一方で律令国家と「蝦夷」社会との接点（いわゆる「辺境」地域）における実際の支配と交流の過程で、国家側の観念的な認識が次第に変質していった可能性という視点も必要であり、「蝦夷」に対する律令国家の認識も、時間の経過とともに変化していったと考えるべきであろう。

本論は現実に行なわれる律令国家の東北地域（陸奥・出羽国）支配とその進行の中で、「蝦夷」という集団がどのように認識され、またそれがどのように変化していったのかという点を考察することを目的とする。もちろんこのような作業も「蝦夷」の実態と本質を完全に説明するものではないが、これまで「蝦夷」に対する律令国家側の認識は八～九世紀にかけて一面的に見られる傾向にあったことも事実である。国家の「蝦夷」政策の本質とともに、「蝦夷」社会の実態を説明する上でも「蝦夷」認識の検討は不可欠なものであることは明らかであろう。またこのような認識は、律令国家と「蝦夷」社会の接点であるいわゆる「辺境」地域における実際の政策とその展開の中で最も顕著に現われるものであるため、ここでは比較的史料に恵まれた陸奥国を中心に、律令国家成立期か

ら八世紀末にいたるまでの「蝦夷」認識とその変化について考察する。^②

①「蝦夷」認識の成立とその実態

七世紀末から八世紀初頭にかけて成立した日本の律令国家はその支配理念の中心に中華思想を取り入れたことは周知の通りである。そして列島内においてそのような理念を具現化させるため「夷狄」^③（異民族）という特殊な身分集団として設定されたのが「蝦夷」であった。^④本来列島東部の未服属集団としては『宋書』倭国伝の倭王武上表文にある「毛人」が知られるが、やがてそれは律令国家の成立過程の中で天皇の教化（「支配」）の及ばない人間集団すなわち「化外」民^⑤「夷狄」として捉え直され、集団呼称も「蝦夷」として固定化される。さらにこのような人間集団の創出により、陸奥・越後（後には出羽）国は、国郡制が施行され百姓（公民）が居住する地域（化内）と、天皇の支配、教化の及ばない「夷狄」である「蝦夷」の居住する地域（化外）に二分されることになる。いわゆる「化内」と「化外」の対立構造が現出することになる。^⑥またこのような特殊な対立構造の成立により、陸奥・越後（出羽）国は実質的には未服属の「蝦夷」の地を含みながらも理念的には北へ果てしなく広がるという極めて特殊な性格を持つことになる。

「蝦夷」に対する特別な認識は『日本書紀』に確認することができる。しかし八世紀の養老年間に成立した『日本書紀』の「蝦夷」認識は、中華的な異民族観の影響を強く受けた記事も含んでおり、そこから古代日本の「蝦夷」認識の生成過程を明らかにする作業はかなり困難であるといえよう。^⑦「蝦夷」を夷狄身分と見なす認識の成立を実際に確認できるのは七世紀末である。

『続日本紀』文武元年（六九七）十月壬午条

陸奥蝦夷貢方物。

『続日本紀』同年十二月庚辰条

賜越後国蝦夷物。各有差。

この二つの史料が明らかにしているのは中華的な方位観にもとづく夷狄観の成立であり、ここでは陸奥が「蝦夷」であるのに対し越後は「蝦夷」となっていることから、陸奥国「蝦夷」を「東夷」、越後国の「蝦夷」を「北狄」として理解していることがわかる。またこれ以前に「蝦夷」という表現が見られないことから、「夷狄」身分としての「蝦夷」とその呼称の成立は浄御原令であると考えて間違いないだろう。しかしこのような認識は極めて観念的なものであり、実際の集団認識にもとづく表記の差でないことも一目瞭然である。従って以上のような記述から、現実存在する人間集団としての「蝦夷」に対する国家側の認識を直接知ることも難しいといわねばならない。

ところで近年の研究では考古学、言語学の成果も取り入れながら、「蝦夷」の実態が具体化されつつある。今泉隆雄氏は律令国家の「蝦夷」に対する異「種族」観は文化（アイヌ語系言語）、生業（農耕、狩猟・採集、漁撈、牧畜）に関する公民との相違が基本になっているものであり、中華思想による文飾だけではないとされる。確かに今日の考古学的成果は北海道式土器文化圏や擦文文化圏といった東北部から北海道にかけての特異な文化圏の存在を明らかにしており、また山田秀三氏⁽⁹⁾によって紹介された東北地方におけるアイヌ語地名の分布は、言語学的にも「蝦夷」の地域的特殊性を示している。問題はどのような文化的差異が律令国家の成立段階においてどのように認識されていたのか、またそれが律令国家によって観念的に作られた「夷狄」「蝦夷」という認識とどれだけ符合するののかという点であろう。今泉氏はこのような異質な人間集団としての認識は、史料に見られる「蝦夷」の「野心」「狼性」という表現に象徴されているとされ、このような「蝦夷」の不服従性が公民との文化・生業における相違であるとされた⁽¹⁰⁾。実際現存の史料からは律

令国家の「蝦夷」に対するさまざまな認識が確認できるが、ただその具体的な認識の多くが八世紀末から九世紀初頭にかけてのいわゆる三十八年戦争前後のものであることは留意すべきである⁽¹¹⁾。また律令国家成立期の八世紀初頭において「蝦夷」の集団的異質性、不服従性を示す表現としては『続日本紀』和銅二年（七〇九）三月壬戌条の「陸奥越後二国蝦夷。野心難馴。屢害良民。」同五年（七一二）九月己丑条の「其北道蝦夷。遠憑阻險。實縱狂心。屢驚邊境。」などがあるが、これらの記事も具体性に乏しく、律令国家がその成立期から「蝦夷」に対してどの程度明確な認識を持っていたのかを明確にすることはできない。

さらに「蝦夷」が律令国家の支配する人間集団である「公民」に対峙する集団という理解に立つ場合、その「公民」自体が非常に抽象的な概念であるという点も指摘できよう。「公民」という語は『続日本紀』の宣命に多く見られるもので、広義には律令国家の統治対象となるべき民衆であるが、その性格については必ずしも明確ではなく、むしろ法的な次元からすれば「蝦夷」の対立概念としてふさわしいのは「百姓」である。本論でも「夷狄」という身分範疇の法的な対立関係にある「百姓」という表現を基本的に用いるが、ただし「公民」にしても「百姓」にしても、それが人間集団としての自律性や集団的（あるいは民族的）共通認識に基づく概念ではないことは言うまでもない。つまり「蝦夷」の対立的な人間集団としてこれらの概念を用いざるをえないところに、「蝦夷」の実態を説明する上での一つの限界があるといっても過言ではない⁽¹³⁾。

このような「蝦夷」に対する認識の複雑さをまさに象徴するのが吉弥侯部（君子部）という姓である。この吉弥侯部については大塚徳郎氏はじめとして多くの研究があり、史料的に八世紀末から九世紀にかけての「俘囚」の多くが「吉弥侯部」姓を称していることから、これを帰降した「蝦夷」（俘囚）に対して付した姓であるという理解が支配的である。

しかし「君子部」姓者はそれ以前から確認され、しかもその分布は陸奥、出羽ばかりではなく、常陸、下野、相模、遠江など東国に広く分布している。このうち遠江については伊場木簡七号に「乙未年入野里人君子マ□」とあり、乙未年すなわち持統九年（六九五）という早い時期からこれが公民（百姓）の姓として認識されていたことも事実である。もともとこれら君子部姓者は東国にのみ見られることから、本来陸奥国に居住していたいわゆる「蝦夷系」の人間が移住したものと考えられる。ただそれにしても国郡制支配に組み込まれた「君子部」と、弘仁年間までは籍帳支配の対象とならず、「俘囚」という身分表象を付されていた「俘囚吉弥侯部」との「蝦夷」としての認識の差は歴然としており、これは吉弥侯部（君子部）という姓に対する認識に変化があったことを窺わせるとともに、「蝦夷」という認識そのものも固定的ではなかったことを示しているのである。

人間集団としての「蝦夷」の実態を端的に説明しているのは石上英一氏と熊田亮介氏である。¹⁶ 石上氏はエスニシティ論の「民族」概念に基づき日本古代における民族的複合・多元的状況の存在を認められた上で、「蝦夷」とは人類学的・民族学的な特徴を誇張しつつ倭人＝日本人との共通性を隠蔽して、政治的に設定された「疑似民族集団」であるとされた。この中で「蝦夷」の主体をなすのは東北地方に居住していた倭人＝日本人であるという理解は今後さらに検討が必要であるが、それが本質的には複数の民族集団を包含するものであるという指摘は興味深い。つまり「蝦夷」とは本来このように多様な実態を持つ人間集団であった可能性があり、だとすれば古代国家による「蝦夷」支配の時間的・地域的変遷により、さまざまな「蝦夷」に対する認識が存在したことも十分に考えられる。これに対し熊田氏は実態としての「蝦夷」は複合的・多元的集団であるという石上氏の理解に依りながらも、多様な人間集団の交流の中で「蝦夷」とされた人間集団の実態について問題を提起されてい

る。氏も論じられるように現実的には「民・夷の接触・交渉はいわば恒常的」な状態であるとすれば、陸奥・出羽地域において国家と対立する集団を常に「蝦夷」に限定する従来の理解も再検討すべきものとなる。「蝦夷」と認識された集団も、その実態は多様な側面を持つものであるという視点も確かに必要であろう。さらに吉弥侯部姓に象徴される認識の変化は、国家による「蝦夷」政策の変化とも関連するものであることは想像に難くない。以下本論では史料に見られる「蝦夷」政策やその推移などから、それぞれの時期における「蝦夷」認識の内実を考察してみたい。理念的には夷狄という身分範疇で捉えられた「蝦夷」に対する認識は、実際に行なわれた支配政策の中でどのように変化していったのだろうか。

② 律令における「蝦夷」認識

律令制という現実的な支配システムが成立する中で、「蝦夷」という特定の人間集団やその地域に対する認識はどのように形成・規定されているのだろうか。律令制支配の最大の特徴は編戸と造籍による個別人身支配にあるが、従来の「蝦夷」研究では、この個別人身支配の成立過程における「蝦夷」の実体化のプロセスについての議論が十分になされてこなかった。その理由は当該期における在地レベルでの「蝦夷」の実体化、もしくは辺境地域における律令支配体制の成立を窺わせる史料が確認されない¹⁷という点に言い尽くされるが、これ以後の律令国家のさまざまな「蝦夷」政策が、実際に在地において「蝦夷」と認識された人間集団やその地域に対し行なわれることを考えれば、律令国家成立期における「蝦夷」認識のあり方が極めて重要な意味を持つものであることは言うまでもない。

律令国家の「蝦夷」政策の基本は、職員令大國条に規定されているこ

とはよく知られている。

『令義解』職員令大國条

大國

守一人。(中略) 其陸奥。出羽。越後等國。兼知。饗給。征討。斥候。

このうち「饗給」とは「饗食并給給禄也」(義解)とあるように賜宴や賜禄を行ない「蝦夷」を服属させる懐柔策であり、「征討」は軍事力の行使による服属の強制、「斥候」は「蝦夷」の動向を探るといふものであった。このうち中心的なものとなるのは饗給であるとされており、近年では陸奥、出羽国の調庸収入のすべてがその財源に充てられていたことなどが明らかにされ、⁽¹⁹⁾「蝦夷」支配における饗給の重要性が強調されている。現在知られている饗給の具体例としては、九世紀のものであるが『類聚三代格』貞観十八年六月十九日太政官符の「俘饗」や、『日本三代実録』仁和三年五月二十日条の「挙納秋饗」などがあり、「蝦夷」に対する饗給は陸奥・出羽国の重要な政策であったことは疑問の余地がない。以上のような政策は陸奥、出羽国のうちでも「蝦夷」社会と接する地域や城柵において展開されたものであるが、律令国家の成立期における饗給の実態については明らかではない部分も多い。また「蝦夷」に対する基本的な政策が賜宴や賜禄などの懐柔的な政策であるとすれば、律令国家はその成立当初から「蝦夷」社会の特異性を認識していたということになる。

ところでこの饗給について『令集解』同条古記には「問。大國撫慰。與考仕令招慰若爲別。答一種。」とあり、これが大宝令段階では「撫慰」と呼ばれ、さらに考仕令(考課令)戸口増益条の「招慰」と同じ性格のものとして理解されていたのである。『令義解』戸口増益条では「招慰」について「謂不從戸貫。謂。蝦夷之類也。而招慰得者。」と説明しており、「招慰」の対象となる戸貫に付されない者として「蝦夷之類」をあげていることから、法的には「撫慰」との共通性を読み取ることも可能であ

る。饗給、撫慰、招慰の関連性については後述したが、「蝦夷」の基本政策とされた「饗給」が大宝令では「撫慰」と表記されていた点は確認しておきたい。この場合撫慰＝饗給と理解できるのが問題となろう。またそれと関連して重要なのが「蝦夷」の法的位置付けである。

A 『令集解』賦役令辺遠国条古記

古記云。夷人雜類謂毛人。肥人。阿麻彌人等類。問。夷人雜類一歟。二歟。答。本一末二。假令。隼人。毛人。本土謂之夷人也。此等雜居華夏。謂之雜類也。

B 『令義解』戸令没落外蕃条

凡没落外蕃。謂没者。被抄略也。没者。遭風波而流落也。得還。及化外人歸化者。所在國郡。給衣糧。具狀發飛驒申奏。化外人。於寬國附貫安置。

C 『令義解』賦役令没落外蕃条

凡没落外蕃。得還者。一年以上復三年。二年以上。復四年。三年以上復五年。外蕃人之投化者復十年。

D 『令集解』同条古記

古記云。問。外蕃人投化者復十年。未知。隼人。毛人。赴化者。若爲處分。答。隼人等其名帳已在朝廷。故歸命而不復。但毛人合復也。

E 『令集解』同条所引開元令

開元令云。夷狄新招慰附戸貫者復三年。

このうちまず「毛人」(蝦夷)を「夷人」＝夷狄として位置付けているのがAの賦役令辺遠国条古記である。注目されるのは「夷人」として認識されているのが「毛人」だけではなく「肥人」や「阿麻彌人」それに「隼人」も含まれるという点であろう。隼人については今日の見解では夷狄として見做すべきではないという理解が支配的であるが、古記の成立が天平十年(七三八)前後であるという理解に従えば、天平年間ま

で夷狄に対する具体的な認識は流動的であったという点は確認できよう。また「化外人」の「帰化」について規定したB戸令没落外蕃条、C賦役令没落外蕃条と「蝦夷」との関連性も重要である。両者は化外人の帰化、あるいはそれに関連する復除の規定であるが、Dの大宝令条文「外蕃投化者復十年」を注釈した古記は「毛人」が「赴化」の場合は「合復」とあることから、毛人が復の対象は化外人と認識されていたことは明らかである。²²しかし同条集解に引かれた唐開元令の「夷狄招慰」に関する規定(E)は日本令に見られないことから、夷狄に対する帰化時の復除規定を削除した日本令は「蝦夷」の帰化を法的に認めておらず、したがって「蝦夷」は化外人ではなかったとする見解もある。²³確かに夷狄招慰条を取り入れなかったという事実から、日本令の「蝦夷」は帰化させるべき存在(化外人)ではないという解釈も可能ではあるが、Eはあくまでも帰化の際の復除規定であるという点は留意しなければならない。これとは別にBが規定する「化外人」の中に「蝦夷」が含まれる可能性も想定できるのであり、律令国家成立当初において「蝦夷」は化外人と認識されていたとともに、法的にも帰化を想定された存在だったのではないだろうか。²⁴

さらにもう一つの問題として、Eの唐令夷狄招慰条の「招慰」と前掲の考課令戸口増益条にある「招慰」との関係がある。熊田亮介氏も指摘されるごとく唐の「招慰」は地方官の専権事項ではなく、それに対し考課令の戸口増益条は「招慰」という語を除けば国郡司の考課に関わるものであり、両者には質的な差異があることは認めなければならない。ではなぜ日本令は本来夷狄の帰化に関わる特殊な用語である「招慰」を、国郡司一般を対象とした規定の中に盛り込んだのだろうか。そこで再び「招慰」と「一種」とされた職員令大國条古記の「撫慰」に注目してみると、これが正確には「大國撫慰」という引用表現をとっている点に気付く。これは単純に訳せば「大國の権能としての撫慰」という解釈が妥

当だと思いが、養老令では「撫慰」にかわる「饗給」は陸奥・越後・出羽国に限定された職掌として規定されており、大宝令註釈書である古記が「撫慰」の註釈に際して「大國撫慰」という引用表現をしているのは気になる点である。先に見た賦役令辺遠國条古記(A)からもわかるように、八世紀前半の夷狄認識はまだ「蝦夷」に収斂されていなかった可能性もあり、またこの「大國撫慰」という表現とセットにして考えると、一般の国郡司の考課に関わる考課令戸口増益条の「招慰」と政策執行者レベルの同質性が高まる点も興味深い。大宝令大國条の全文が復元できない以上、これらの議論に深入りすることは慎重ななければならないが、いずれにしても大宝令段階における対「蝦夷」政策の基本的形態である「撫慰」が、実際には「饗給」(衣食の支給などによる懐柔策)という形態で行なわれていたのかという点は再度確認する必要があるように思われる。また古記が撫慰と招慰を「一種」と理解したのは、おそらく「蝦夷」を未編戸者の一形態と解釈したためだと考えられる。ここでは古記の解釈に従い撫慰と招慰と理解しておきたい。さらにこのような問題は先にも触れた養老令における「撫慰」から「饗給」への変化にも関連するものである。すでに知られているように、実質的な饗給は七世紀段階から「蝦夷」に対する服属儀礼として行なわれていた行為であり、だとすればそのような実例がありながらなぜ大宝令が「撫慰」という表現をとっているのかという点は明らかにしなければならない。大宝令における「蝦夷」支配の基本政策である撫慰と招慰は、実際にはどのような内容を持つものなのだろうか。

③ 八世紀前半の「蝦夷」政策とその認識

成立期律令国家の「蝦夷」認識を理解する上で、「撫慰」(招慰)を中心とした政策の内実がどのようなものであるのかという点がポイントと

なることは確認されたと思う。だが前にも述べたように大宝律令の成立期である八世紀初頭において、「撫慰」の実態を知ることができる史料は見当たらないのも現状である。その中にあって間接的にはあるがそれを知る手がかりとなるのは、養老四年（七二〇）と神亀元年（七二四）に発生した「蝦夷」の反乱であろう。言うまでもなくここにいう「反乱」とは律令国家側の捉え方であるが、さらにもう一步踏み込んで考えた場合、その反乱が発生した契機として国家の「蝦夷」社会に対する具体的な支配政策があったことを指摘できる。まずは史料を掲げてみたい。

『続日本紀』養老四年九月丁丑条

陸奥国奏言。蝦夷反乱。殺按察使正五位下上毛野朝臣廣人。

『続日本紀』神亀元年三月甲申条

陸奥国言。海道蝦夷反。殺大掾從六位上佐伯宿禰兒屋麻呂。

この二つの反乱記事は、すでに八世紀の前半から律令国家と「蝦夷」社会との対立が表面化していたことを物語っており、そして按察使や国司の殺害という事実からは、律令国家の支配そのものに対する「蝦夷」社会の抵抗を見て取ることができる。問題となるのはこのような形で対立が表面化するにいたった支配政策の内実であろう。そこで注目したいのは同じく八世紀前半に発生した隼人の反乱記事との共通性である。隼人の反乱は大宝二年（七〇二）、和銅六年（七一三）、養老四年に記事が見られ、このうち大宝二年については『続日本紀』の同年八月丙申条に薩摩多禰。隔化逆命。於是發兵征討。遂投戸置吏焉。

とあるように、これが国郡制の施行（実質的には編戸）に対する在地側（薩摩隼人）の抵抗であることが確認される。和銅六年にも大隅国が建國されており、この両者については国郡制支配に対する隼人社会の反発と理解することができよう。²⁶ また養老四年の反乱についてはその翌年に造籍が行なわれていることから、それに関わる抵抗であるとされており、「蝦夷」の反乱とほぼ時を同じくして起きた隼人の反乱がいずれも薩

摩・大隅国における国郡制の拡充と密接な関連を持っている点は確認しておきたい。そこでこのような点を前提にして「蝦夷」の反乱をみると、まず養老四年は隼人の反乱と同年であることから造籍がその主な要因となっている可能性が考えられる。一方神亀元年は後述のように養老二年に分立した石城・石背国を再併合し、広域陸奥国が復活したとされる年である。平川南氏²⁷はこれら「蝦夷」と隼人の反乱記事の共通点として、新たな国郡制の施行や造籍などがその原因であるとし、反乱の本質は律令国家成立期における辺境地域の行政整備に対する在地社会の抵抗であるとされた。従うべき見解であると思われるが、さらにここでは反乱の契機となったのが行政支配の拡充であったということの意味を考えてみたい。

まず養老と神亀年間における按察使や国司による編戸民の拡大政策、すなわち戸口増益が行なわれた背景について論じる。この時期陸奥国では前にも触れたように石城・石背国の分立という行政単位の大規模な再編成が行なわれている。

『続日本紀』養老二年（七一八）五月乙未条

割越前国羽咋。能登。鳳至。珠洲四郡。始置能登国。割上総国平群。安房。朝夷。長狭四郡。置安房国。割陸奥国石城。標葉。行方。宇太。日理。常陸国之菊多六郡。置石城国。割白河。石背。會津。安積。信夫五郡。置石背国。割常陸国多珂郡之郷二百一十烟。名曰菊多郡。属石城国焉。

工藤雅樹氏²⁸は石城・石背国の分立の意義について、和銅五年（七一三）に建てられた出羽国との同質性を指摘し、さらにこれは「蝦夷」と直接境を接する特別な地域として独立化させるのが目的であったとされる。また熊谷公男氏²⁹はこれに加えて石城・石背国が陸奥国から分離することによって、坂東諸国とともに新制陸奥国の後方基地としての役割を担ったと論じられる。だがこの三国はほどなく再併合されたようであり、

遅くとも神亀元年（七二四）には元の陸奥国が復活したことが確認される（『続日本紀』神亀元年四月癸卯条）。熊谷氏は復活した広域陸奥国の意義について、これまで東国に依存していた蝦夷の支配を陸奥一国で可能な限り行なうような体制の創出にあったとされ、それを裏付けるものとして（1）陸奥国府としての多賀城の創建、（2）鎮守府・鎮兵体制の創建と軍団制の整備強化による陸奥国の国力・軍事力の強化をあげられる。確かに神亀元年を一期とした行政、軍事制度の拡充により、陸奥国は「蝦夷」支配においてそれ以前とは異なった性格を持つようになったことは明らかであるが、その画期性とともになぜ石城・石背国が短期間で再併合されなければならなかったのかという問題も考慮すべきであろう。神亀元年の「蝦夷」反乱も、おそらくこの再併合と何らかの関連を持つものであることは確実である。またこれまでほとんど論じられてこなかったが、『続日本紀』養老二年五月乙未条を見ると、この時石城・石背国の分立とともに加賀国から能登国が、上総国から安房国が分立しており、この分割された二国はその後一度再併合されるものの、最終的には単独の令制国としての機能を維持していることからすれば、新制陸奥国にも当初同様な機能が期待されていたと解釈することもできる。そして陸奥国の分割、再併合がいずれも「蝦夷」政策と密接な関連があることを踏まえた場合、この分割、再併合という政策転換の背景に、律令国家の「蝦夷」に対する認識の変化を読み取ることも可能である。

そこでもう一度律令国家の対「蝦夷」基本政策である「撫慰」について確認すると、これが「不従戸貫者」の編戸を目的とした具体的政策である「招慰」と同義であることが改めて重要な意味を持つと思われる。養老二年に分立した新制陸奥国に対して令制国としての一般的な機能が期待されていたことを窺わせる材料として、東国からの大量の百姓集団（柵戸）の移住をあげることができるが、ここではそれとともに「蝦夷」社会に対する戸口増益・百姓化政策も計画されていたと考えた

い。工藤氏も指摘されているごとく、新制陸奥国は単独の令制国としては力が乏しかったと思われるが、それにも拘らずこれを分立させた背景には、「蝦夷」社会に対する「撫慰」（招慰）により実質的な戸口の拡大がある程度可能であるという認識が存在していたのではないだろうか。

国郡制支配の拡大は、建郡などによる地域集団の編戸・百姓化が基本的な形態としてあげられるが、それは考課令の「不従戸貫者」を対象とした「戸口増益」とも結びつく政策である。しかしこれが律令国家の基本的な支配集団である百姓（公民）身分のみを対象にしたものだとすれば、そこに「蝦夷」の抵抗の必然性を見いだすことは難しい。だとすれば当然その対象に「夷狄」も含まれていたと考えざるをえないのだが、すでに論じたように「夷狄」身分である「蝦夷」は法的には直接編戸の対象にならない存在であった。彼らの編戸・百姓化が実現するには「帰化」もしくは「撫慰」（招慰）というプロセスが必要であるが、ここでは「不従戸貫」者に対する「招慰」と同一次元の政策であった「撫慰」を通じて「蝦夷」の編戸に関する具体的措置が計画・実行されたとも考えられるのである。³⁰ 反乱で殺害させた二人の人物のうち上毛野朝臣廣人については按察使として見えるが、按察使は国司が兼任するのが基本であり、また按察使の職掌に「繁殖戸口増益調庸」（『類聚三代格』養老三年（七一九）七月十九日官符）とあることから、彼はどちらの立場でも「招慰」を行なうことができたと解釈して差し支えないだろう。このような「蝦夷」に対する「撫慰」（招慰）が実際の政策として行なわれていたことを示すものとして「蝦夷」の百姓化史料があげることができる。

『続日本紀』靈龜元年（七一五）十月丁丑条

陸奥蝦夷第三等邑良志別君宇蘇弥奈等言。親族死亡子孫数人。常恐被狄徒抄略乎。請於香河村。造建郡家。爲編戸民。永保安堵。又蝦夷須賀君古麻比留等言。先祖以来貢獻昆布。常採此地。年次

不_レ闕。今国府郭下。相去道遠。往還累_レ旬。甚多_二辛苦_一。請於_二閉村_一。便建_二郡家_一。同_二百姓_一。共率_二親族_一。永不_レ闕_二貢_一。並許_レ之。

すでに伊藤循氏も述べられるように、この記事から建郡により「蝦夷」の百姓化が行なわれたと考えることができる。香河村や閉村は律令国家の支配領域とは離れた飛び地的な地域であり、そこにおける「(造)建郡家」や「爲_二編戸民_一」の実態は気になるところであるが、ここで重視しなければならないのはその内実よりも、むしろ「蝦夷」と認識された人物、集団による建郡、編戸民(百姓)化の要求が国家により認められているという事実であろう。このほかに「蝦夷」による百姓化の請願を示す記事として『続日本紀』和銅三年(七一〇)四月辛丑条の

陸奥蝦夷等。請_二賜_二君姓_一。同_二於編戸_一。許_レ之。³²⁾

というものがあるが、このような記事はそれ以降天平二年(七三〇)の「田夷」による建郡のほかに確認することができないことから、積極的な「蝦夷」の百姓化は八世紀前半における「蝦夷」認識の特質をよく表すものといえる。つまり政策レベルではあるが、律令国家は養老年間ごろまでは「蝦夷」とその社会に対する異質性、不服従性を明確に認識した政策を行なっており、『日本書紀』に代表されるような理念的な夷狄認識とは別に、実質的には中国の夷狄政策を基本的に継承する形で「蝦夷」社会の内国化・百姓化がある程度計画されていたと思われる。しかし新制陸奥国の分立に伴い行なわれたとみられる大規模な「蝦夷」の編戸・百姓化に対する在地社会―「蝦夷」社会―の抵抗は、結果的にそのような支配の実現化が非常に困難であることを律令国家側に認識させることになる。養老四年、神龜元年における「蝦夷」の反乱は、律令国家成立当初の実質的な対「蝦夷」政策＝百姓化の限界を示すものであると同時に、新たな支配の方式を模索させることになるのである。

以上のような律令国家の政策レベルから、この時期における「蝦夷」認識について考えてみたい。すでに述べたようにこの時に「蝦夷」に対

する編戸政策が行なわれていたとすれば、それは法的には「不_レ從_二戸貫_一者」を対象とする「招慰」(撫慰)として行なわれたと思われるが、それが実質的には「饗給」という衣食の支給をともなう形態のものが主流であったのかという点が問題となる。そもそも「饗給」はその実例からみてもわかるように懐柔策としての性格を持つものであり、そこに「招慰」のような政策意図がどの程度組み込まれているのかという点も研究者によって見解が分かれるところである。『令集解』職員令大國条穴記は「饗給」について「饗給上也。謂_二招慰不_レ從_二戸貫_一之輩_一。」と理解しており、ここからは饗給＝招慰ととれないこともないが、「蝦夷」の百姓化が八世紀前半以降実際には認められないことなどもあわせて考えた場合、「撫慰」と「饗給」とは理念的にも政策的にも異なる性格を持つものと理解すべきではなからうか。さらにこの時期の「蝦夷」政策の基本が「饗給」であったと考えた場合、それが「蝦夷」社会の抵抗という現象と結びつく点も説明がつきにくいところである。だとすればこの段階における「撫慰」は衣食の支給を行なう懐柔政策的な内容のものではなく、戸口増益を実現するためのかなり実質的な作業であったと考えられるのであり、それは隼人社会に対して行なわれた「授_二戸置_一吏」の前提となるものであったと考えるのが最も妥当であると思われる。では律令国家成立期の大宝令制下において「饗給」は行なわれていなかったのだろうか。ちょうど新制陸奥国分立期にあたる『続日本紀』養老六年(七二二)閏四月乙丑条には

陸奥按察使管内。百姓庸調浸免。勸_二課農桑_一。教_二習射騎_一。更稅助邊之資。使_二擬賜_二夷之祿_一。其稅者。每卒一人。輸布長一丈三尺。闊一尺八寸。三丁成端。

という記事がみられ、「賜夷之祿」として「更稅」が陸奥按察使管内で徴収されていたことがわかる。文意からこの「夷」に対する賜祿が饗給であることは明白であるが、それが「蝦夷」の百姓化(公民法)を目的

として行なわれたものかどうかは判断の分かれるところであろう。九世紀以降の史料にみられる「饗給」は内容的に懷柔策としての性格を持つが、その一方で「蝦夷」社会との政治的関係や貢納制を維持・拡大するという役割を担っていたことも考えられるのであり、それはまさに『日本書紀』の齊明紀などにある饗給記事と本質的に同じものといえる。この史料に関しても同様のことが言えるのであり、「饗給」が律令国家の成立段階から「蝦夷」に対する基本政策として位置付けられていたのか、またそれが百姓化（公民法）を目的として行なわれたのかという点は改めて検証する必要がある。

①「俘囚」身分の成立と境界認識

これまで述べてきたように、養老二年の新制陸奥国の成立期を中心に積極的に展開された「蝦夷」社会の百姓化政策は、結果的にその抵抗により挫折し、国家側はその支配方式の転換を余儀なくされたと考えられる。熊谷氏が提示される「神亀元年体制」は確かに陸奥国の新たな「蝦夷」支配の成立を示すものであるが、これを律令国家の「蝦夷」に対する認識という観点から見た場合、その内容に大きな変化が起きている事実も見逃せない。そのような変化をまさに象徴するのが神亀元年の「蝦夷」反乱を契機として生まれたと考えられる「俘囚」の存在である。

『続日本紀』神亀二年（七二五）閏正月己丑条

俘囚百卅四人配于伊予国。五百七十八人配于筑紫。十五人配于和泉監焉。

この俘囚発生の歴史的意義を明らかにされたのが石母田正氏⁽³⁵⁾である。氏によれば「俘囚」とは日本の律令国家が夷狄身分としての「蝦夷」を設定したものの、現実の「蝦夷」支配が進行するにつれて百姓・夷狄（蝦夷）という対立構造のみでは捉えきれない中間的身分として生まれたも

のである。石母田氏の俘囚に対する理解は、日本古代の身分論、いわゆる「良人」「王民共同体」論の一環として述べられたものであるが、このような中間的な身分の発生はまさに「蝦夷」に対する認識の変化という観点とも一致するものであることは言うまでもない。ではこの「俘囚」に対する認識は、律令国家のそれまでの「蝦夷」認識とどのように異なるのであろうか。

俘囚は身分的にみれば石母田氏の指摘のごとく百姓と夷狄の中間的な存在であり、それをもつともよく示すものとしてよく紹介されるのが(a)『続日本紀』神護景雲三年（七六九）十一月己丑条と、(b)宝亀元年（七七〇）四月癸巳条である。この二つの史料の内容については⑥節で検討するが、要点のみを記せば俘囚とは(a)「化民」身分ではあるが(b)「王民」ではなく、ともに「俘囚之名」を除いて「調庸民」となる⁽³⁶⁾。「俘囚」の身分を示す「化民」はこの史料のほかに確認できないため、これが俘囚独自の身分概念として発生段階から認識されていたかどうかは定かではないが、少なくとも「俘囚」は調庸民（百姓）ではなく、それは「俘囚」が九世紀初頭までは租税や賑給の対象から外されていることから明らかであろう。律令の理念からすれば「夷狄」でも「百姓」でもない身分集団である「俘囚」は存在しえないが、それを創出したというところに国家側の新たな「蝦夷」認識の展開を見ることができるのである。このような中間的身分が成立した背景には「蝦夷」社会に対するそれまでの百姓化政策の行き詰まりがあることはこれまで論じた通りであり、またこれは以下に述べるように百姓化（公民法）を前提とした身分であったとも考えにくい。

では実際に創出された「俘囚」という身分集団から、どのような「蝦夷」に対する認識の変化が読み取れるのであろうか。俘囚の初見記事である『続日本紀』神亀二年閏正月条は移配に関するものであり、それまでの「蝦夷」との大きな違いとして「辺要国」である陸奥国から内国へ

の移配が行なわれたという点を指摘することができる。⁽³⁷⁾ また移配の実質的な理由については東国防人の代替兵力としての機能が期待されていたことも天平十年（七三八）の『駿河国正税帳』『筑後国正税帳』などから確認でき、このような政策は九世紀初頭には制度化されることも知られている。たとえば『類聚国史』大同元年（八〇五）十月壬戌条には

勅。夷俘之徒。慕化内属。居要害地。足備不虞。宜在近江国。夷俘六百冊人。遷大宰府。置爲防人。⁽³⁸⁾（中略）其去年所置防人四百十一人皆宜停廢。

とあり、「夷俘」が防人に代わる兵力として大宰府管内に配置されている事実が確認されている。問題となるのは防人の代替兵力として移配するという政策の背景にある認識であるが、これを解く上で鍵となるのが東国防人の性格であろう。西郷信綱氏によれば東国は王権の守護という役割を担わされていたと思われ、そこには軍事的な面での王権への奉仕が要請されていた。「俘囚」の移配も理念的にはこの延長線上に位置付けられるが、そこでもう一つ重視しなければならないのが「俘囚」の持つ兵士としての卓越性であろう。⁽³⁹⁾

『類聚三代格』貞観十一年（八五九）十二月五日官符

応下配置夷俘備警急事

右大宰府解稱。檢案内。警固官符先後重疊。因茲簡練士馬。慎備非常。爰新羅海賊侵掠之日。養遣統領選士等。擬令追討之時。其性懦弱。皆有憚氣。仍調發俘囚。銜以征略。意氣激怒。一以当千。（後略）

これも九世紀の「俘囚」に対する認識であるが、「一以当千」という表現は多少の誇張はあるにしても「俘囚」の持つ優れた戦闘能力を示したものと見えよう。このような認識は基本的には八世紀から続くものであると考えられ、だとすれば神亀二年の「俘囚」移配記事は律令国家の「蝦夷」認識が新たな形で展開したものと理解できる。しかしこの政

策転換は、それまでの「蝦夷」支配政策の矛盾から生み出されたものであることも忘れてはならず、換言すれば国家が認識した「俘囚」の持つ優れた戦闘集団としての側面は、彼らのもつ不服従性、すなわち今泉氏が指摘されたような「野心」「狼心」という性格と表裏一体のものであることも明らかであろう。「俘囚」身分の創出と移配は、そのような異質性と百姓化の限界を認識せざるをえない段階において、逆にそれを積極的に利用しようとしたところにその本質があり、「蝦夷」を「夷狄」身分として帰化・百姓化の対象にするという法的レベルでの支配認識から、より実態的な認識に変化したと評価することができよう。⁽⁴⁰⁾ 実際の支配においては「蝦夷」と「俘囚」には大きな差が見られるが、その異質性という点において両者の認識には大差はなかったのではなからうか。⁽⁴¹⁾

ところで「俘囚」発生のもう一つの要因としてあげられるのが和銅・養老年間に東国から陸奥・出羽国に移配された大量の移民（柵戸）の存在である。陸奥国は『続日本紀』靈龜元年（七一五）五月庚戌条に移配記事が見られる。

移相模。上総。常陸。上野。武蔵。下野六国富民千戸。配陸奥焉。

この時の移民は「千戸」という大規模なものであり、またその移住先は和銅六年（七一三）に設置された丹取郡、のちの黒川十郡であったとされている。東国からの大量移配は、先に論じた養老二年における新制陸奥国の分立に向けての国力拡充政策としての性格を持つものであるが、これが「俘囚」という新たな「蝦夷」認識の成立とどのように関係するのであろうか。これについて平川南氏⁽⁴²⁾は和銅・養老年間における全国的規模での地方行政の再編と関連して、柵戸の大規模な導入と蝦夷の内国への移住という東北政策の根幹をなす政策が実施されたとされ、東国からの柵戸の移住を大きな契機とみられる。また伊藤氏⁽⁴³⁾も陸奥国における建郡政策と「俘囚」身分の成立について言及され、辺境の建郡政策は

霊亀元年を境として蝦夷の百姓化による建郡から、百姓（東国住民）の移配による建郡を主体としたものに変質するとし、「俘囚」が発生したのも霊亀元年以降であるとされる。両氏とも「俘囚」と東国移民による建郡との関連性を認められており、本論でも双方の関連性を認めるという理解については継承したい。ただ養老四年、神亀元年の「蝦夷」反乱記事の考察から明らかにしたように、新制陸奥国は建郡を基軸にした「蝦夷」の実質的な百姓化政策（撫慰＝招慰）を展開していた可能性があり、だとすれば陸奥国が分割された養老二年の段階では、東国からの移民政策と「蝦夷」の百姓化政策の二つが並行しながら建郡が計画されていたと解釈するのが妥当である。伊藤氏も論じられるようにこの二つの政策は住民の百姓化＝「化内」化という基本理念では共通しており、東国からの移民も実質的には「戸口増益」を目的にしたものであるが、同時にそれは未支配地域・住人の百姓化政策としての性格を持つものでもある。「俘囚」の発生と移配はこの移民政策と連動するものであることはその通りであるが、むしろそのような移民による建郡ともに行なわれた「蝦夷」社会の百姓化政策の限界が表面化したものと捉えるべきであろう。

この「俘囚」の成立に加えて「蝦夷」社会との地域的な境界認識が具体化するのも神亀年間であり、いわゆる黒川以北十郡の成立がそれにあたる。黒川以北十郡とは『続日本紀』延暦八年（七八九）八月己亥条に其牡鹿。小田。新田。長岡。志太。玉造。富田。色麻。賀美。黒川等一十箇郡。与賊接居。不可同等。故特延復年。

とある「一十箇郡」であり、熊谷公男氏によればその成立は神亀五年（七二八）をそうさかのほらない時期であるが、この十郡が霊亀元年の東国移民を主要な構成員としたことからすれば、養老年間にはその大枠が定まっていたと考えられよう。⁽⁴⁵⁾そして東国の百姓集団を主な構成員として律令国家の支配の最前線に建郡された黒川以北十郡の成立により、

それ以北の「蝦夷」の居住地域は異質の社会としての色彩をより強く帯びることになる。

『類聚三代格』弘仁五年（八一四）三月二十九日官符
應聽_下以同姓人_上補_中主政主帳_上事

右檢_上天平七年五月廿一日格稱。終身之任理可_中代遍。宜_上郡不得并_中用同姓。如於_上他姓中_中无_上人_中可_上用者。僅得_上用_中於少領已上_上。以外悉停_上任。但神郡国造陸奥之近_上夷郡。多嶺嶋郡等。聽_上依_上先例者。（後略）

ここに見られる「近夷郡」⁽⁴⁶⁾とは黒川以北十郡をさすものであるが、この表現からは同地域が「蝦夷」社会との境界線であるという認識を読み取ることができる。実はこのような「蝦夷」社会との境界認識は八世紀初頭の史料には確認されず、黒川以北十郡の成立とともに顕在化するという点は注目したい。その理由としてまず考えられるのは、他地域（東国）からの移住民により建郡された特殊な地域の誕生により、その北側の未支配地域「蝦夷」社会との地域的格差が顕著になったことであるが、それとともに「蝦夷」支配政策とその挫折による政策転換も要因としてあげられる。すなわち律令国家成立当初において「蝦夷」に対する支配は「撫慰」（招慰）という百姓化政策として展開されたが、養老四年、神亀元年の相次ぐ「蝦夷」社会の抵抗などにより、その限界と「蝦夷」社会の異質性を国家側に認識させることになった。そしてこのような認識の変化は「蝦夷」の派生的な身分としての「俘囚」を創出させるとともに、国家支配の最前線において東国移民を主な構成員とする百姓集団の創出が可能な地域（黒川以北十郡）と不可能な地域「蝦夷」社会との地域的差異を生み出すことになる。この地域が「近夷郡」と表現されたのはまさに百姓化政策の限界という現実を背景としているのであり、それはこの黒川以北十郡を「蝦夷」社会との境界とする認識がこれ以降固定化するという事実からも証明される。このような認識を最も

明確に表すものが天平宝字六年（七六二）建立の「多賀城碑」の記述であらう。⁽⁴⁷⁾

多賀城 去京一千五百里

去蝦夷国界一百廿里

去常陸国界四百十二里

去下野国界二百七十四里

去靺鞨国界三千里

ここにある「蝦夷国」は多賀城からの距離が一二〇里という具体的な数値が明記されており、また常陸国や下野国という明確な領域をもつ国と同様の記載をされていることから、単なる観念的なものではなく多賀城という「蝦夷」支配の最前線で実際に認識されていた「蝦夷」の居住地域であることは間違いない。一二〇里というのは距離としては七八キロメートルではほぼ黒川以北十郡の北方地域にあたり、まさに陸奥国における国郡制支配地域の北限であった。⁽⁴⁸⁾ 黒川以北十郡はその表現からもわかるように十郡全体が「蝦夷」社会との境界として意識されており、つまり境界としては面的な構造である点に特徴があるが、「多賀城碑」では明らかに線として認識されていたことがわかる。さらに前掲の『続日本紀』延暦八年八月条、『類聚三代格』大同五年（八一〇）二月二十三日官符の「黒川以北之奥郡」という記述からもわかるように、同地域は「蝦夷」社会との対立が最も深刻な状態であった八世紀末から九世紀初頭にかけても境界と考えられていた。黒川以北十郡の境界としての認識はその後もしばらく続いたのである。

以上の考察から「蝦夷」という集団、地域に対する具体的な認識の形成時期として養老―神龜年間が一つの画期であることを論じた。このような理解は従来あまり取られておらず、論証されきれていない部分もまだ多く残っているが、この時期に生まれた「俘囚」や「近夷郡」（あるいは奥郡、辺郡など）という「蝦夷」の新たな身分や境界地域を表す概

念が、結果的に九世紀以降も用いられるという点はやはり重要な意味を持つと思われる。律令国家の成立により理念的に創出された「化内」と「化外」の対立構造も、「近夷郡」（黒川以北十郡）の成立により具現化するのであり、この時期は「蝦夷」に対する認識が集団的にも地域的にも実体化していくのである。⁽⁴⁹⁾

⑤「蝦夷」政策の転換と認識の変化

これまで見てきたように、理念的には八世紀初頭からあった百姓（公民）と蝦夷との対立構造は、陸奥国においては養老―神龜年間に展開された「蝦夷」の百姓化政策の挫折により、異質の人間集団という認識として具体化してきたことが明らかになった。しかし実はこれも八世紀末以降における「蝦夷」社会との対立やそこに見られる差別認識に直結するものではなく、律令国家の「蝦夷」認識は八世紀前半の養老―神龜年間に顕在化して以降も変化していると考えられよう。神龜年間以降実際に行なわれた「蝦夷」政策としては天平九年（九三三）のいわゆる出羽路開削が大きな事業として著名であるが、それとともに注目されるのが天平宝字元年（七五七）を境にして変化する律令国家の対「蝦夷」政策である。平川南氏⁽⁵¹⁾が指摘されるように、律令国家と「蝦夷」社会との関係が大きく変化するのには天平宝字年間から始まる桃生城、伊治城の造営にともなう新たな支配領域の拡大であることも明らかであり、このような動きが最終的には宝龜年間以降の「蝦夷」社会との衝突、いわゆる「三十八年戦争」へと発展することも確かであろう。その意味では対立の遠因はすでに八世紀中頃の「蝦夷」政策の中に存在していたということになる。

しかし本論の観点から着目したいのは、このような中央の政策転換が、「蝦夷」という集団や地域に対する認識にどのような影響を与えたのか

という点である。結論から先にいえば、この時期における「蝦夷」社会に対する新たな支配政策とその理念が、八世紀後半以降の「蝦夷」社会との連続的な対立状態や、九世紀以降の「蝦夷」認識の固定化にも大きな影響を及ぼしていると考えられる。ここでは特に天平宝字年間からの対「蝦夷」政策がどのような特質を持ち、またそれによって近夷郡などの境界地域で「蝦夷」をめぐるどのような認識が生まれたのかを明らかにしたい。

以上のような問題を探る上で重要な意味を持つ史料が『続日本紀』天平宝字二年（七五八）六月辛亥条である。

陸奥国言。去年八月以来。帰降夷俘。男女惣一千六百九十餘人。或去_レ離本土。帰_レ慕皇化。或身涉_レ戰場。与_レ賊結_レ怨。惣是新来。良未_レ安堵。亦夷性狼心。猶豫多_レ疑。望請。准_レ天平十年閏七月十四日勅。量_レ給種子。令_レ得_レ佃_レ田。永爲_レ王民。以充_レ辺軍。許_レ之。

この史料で最初に確認しておかなければならないのが「夷俘」という用語である。すでに指摘されているように、これは「蝦夷」と「俘囚」の複合名詞であると考えべきであろう。⁽⁵²⁾つまり「夷俘」は養老・神龜年間における「蝦夷」政策の矛盾から生じた「俘囚」身分も含む、「蝦夷」集団総体を示す用語である。さらにこの記事が「夷俘」という表現の初見であるという点も看過できない。これ以前の史料では「蝦夷」と「俘囚」は区別して表記されているが、両者に対する認識に本質的な差異がなかったとする前節の推測が正しいものとすれば「夷俘」はまさに国家によって把握された「蝦夷」の総体的な表現と理解すべきだろう。服属の規模についても、帰降した「夷俘」の人数が一七〇〇人近くの大規模なものである点もこれまでに例がなく、さらにそれが「去年八月以来」の僅か一年ほどの間に起きた現象であることは注目し値しよう。このような短期間における「夷俘」の帰降を可能にしたのは天平宝字元年に陸奥守に就任した藤原朝鑑の政策であり、彼の就任は『続日本紀』天

平宝字元年七月甲寅条に確認されることから、これが朝鑑の陸奥守就任直後から開始されていたものであることがわかる。だとすればこの「夷俘」の帰降を促した新たな「蝦夷」政策は、すでに彼の就任前から計画されていた国家レベルのものであったと推測される。また帰降し服属した「夷俘」の動向についてみると、本土（本来の居住地）を離れて「皇化」に帰す者と、戦場に身を置き対立する「蝦夷」勢力との争いを続ける者があつたとしているが、このうち前者は城柵など律令国家の公的な施設に直接服属し、何らかの台帳などに登録された者で、いわゆる「俘囚」身分がこれにあたると考えられる。⁽⁵³⁾これに対し後者は律令国家に服属しながら、実際には在地社会において敵対勢力との争いを継続する「蝦夷」であり、この時期の帰降政策が短期間のうちに具体的な成果となつて表れたのは、当時の「蝦夷」社会の実態なども少なからず影響しているであろう。

ではこのような大量の「蝦夷」の帰降者を生み出した当該期の対「蝦夷」政策にはどのような特徴があるのだろうか。律令国家の「蝦夷」政策の基本はすでに述べたように「饗給。征討。斥候。」であり、そのうち最も重要なものが「饗給」であるとされてきた。しかしこれまでの考察から陸奥・越後（出羽）国がその成立当初から「饗給」を基軸とした「蝦夷」政策を展開していたと判断するには問題があり、むしろ実際の政策としては建郡、編戸による百姓化を期待した「撫慰」（招慰）が行なわれていた可能性があることはすでに論じたとおりである。だが「蝦夷」社会の抵抗により、律令国家は「蝦夷」に対する新たな認識を持つとともに、その支配政策の転換も余儀なくされたのである。対「蝦夷」の基本政策が「撫慰」（大宝令）から「饗給」（養老令）に書き替えられたというのは、まさにこのような認識の変化によるものであるが、その変化を象徴しているのが天平宝字元年以降の「蝦夷」政策ではないだろうか。そう考えると、「饗給」と規定された養老令の施行が天平宝字元

年であるという点も単なる偶然ではなさそうである。もちろん実質的な「饗給」行為がこれ以前から行なわれていたことは確認した通りであるが、法的な次元での「饗給」の成立が天平宝字元年まで下るという事実はやはり注目すべきだろう。養老令における「饗給」の理念を具体的に示す史料は見当たらないが、『続日本紀』天平宝字三年（七五九）六月丙辰条には

律令格式者。録_レ当今之要務。具_レ庶官之紀綱。並是窮_レ安_レ上治_レ民之道。盡_レ濟_レ世弼_レ之宣。

とあり、律令格式が「弼化」＝天皇の教化を補弼する機能があるとする記事が確認される。この場合の律令とは具体的には二年前に施行された養老律令であることは言うまでもなく、つまり養老律令の施行にあわせて、律令格式が天皇の教化が実現される際の媒体としての機能を持つことが再確認されているのである。⁽⁵⁴⁾この時期に「化」＝天皇の教化が再びクローズアップされてくる点は非常に興味深く、「蝦夷」に対する基本政策である「饗給」も、法理念としてはこのような「教化」という側面から理解すべきものであることは間違いない。

さて天平宝字元年を転機とした「蝦夷」政策の変化を直接知ることができる史料も残念ながら存在しない。しかし先に紹介した夷俘の大規模な帰降が短期間に行なわれた背景には、当然新たな懐柔策が取られたとみるのが自然である。それがまさに「饗給」であり、その成果を端的に物語っていると思われるのが『続日本紀』天平宝字四年（七六〇）正月丙寅条である。

勅曰。盡_レ命事_レ君。忠_レ臣至節。隨_レ勞酬_レ賞。聖主格言。昔先帝數降_レ明詔。造_レ雄勝城。其事難_レ成。前將既困。然今陸奥国按察使兼鎮守將軍正五位下藤原惠美朝臣朝獵等。教_レ導荒夷。馴_レ從皇化。不_レ勞_二一戰_一。造成既畢。又於_二陸奥国牡鹿郡。跨_二大河_一。凌_二峻嶺_一。作_二桃生柵_一。奪_二賊肝膽_一。眷言惟續。理應_二褒昇_一。宜_レ擢_二朝獵_一。特授_二從

四位下。（中略）自餘從_二軍国郡司軍殺並進_二階_一。但正六位上別給_二正稅貳仟束_一。其軍士蝦夷俘囚有功者。按察使簡定奏聞。

ここでは藤原朝獵が雄勝城の造営にあたり「荒夷」＝夷俘を「教導」し、「馴_レ從皇化」させたので戦闘に及ぶことなくこれを完成させ、また桃生柵も造営したとある。このうち雄勝城については『続日本紀』天平五年（七三三）十二月己未条に「出羽柵遷_二於秋田村高清水岡_一。又於_二雄勝村_一。建_二郡居_一民焉。」とあり、この時建郡（雄勝城の造営）が行なわれたように見えるが、同じく天平九年正月丙申条にある大野東人の出羽路開削進言の時には「從_二陸奥国_一達_二出羽柵_一。道經_二男勝_一。行程迂遠。請_二征_二男勝村_一以通_二直路_一。」と記されていることから、実際には雄勝城の造営は行なわれていなかったのであらう。⁽⁵⁵⁾これとは別に『続日本紀』天平宝字三年九月己丑条には

勅。造_二陸奥国桃生城_一。出羽国雄勝城。所_レ役郡司。軍殺。鎮兵。馬子。合_二一百八十人_一。從_二去春月_一至于秋季。既離_二郷士_一。不_レ顧_二産業_一。とあり、同日条には

始置_二出羽国雄勝。平鹿二郡_一。玉野。避翼。平戈。横河。雄勝。助河。並_二陸奥国嶺基等駅屋家_一。

という記事がみられることから、雄勝城の造営（建郡）は天平宝字三年と考えられるが、少なくとも以上の史料から雄勝城は天平五年から造営が計画されていたことは間違いない。しかしそれが容易に達成できなかったのは、出羽国においても現実的な政策としての建郡や「撫慰」による「蝦夷」の百姓化が非常に困難であるという認識が存在していたからであり、実際天平九年の大野東人の出羽路開削記事における「賊地」という表現などは、そのような認識を如実に示すものといえる。桃生柵についても同じであり、黒川以北十郡の北辺を「蝦夷国」（多賀城碑）との境界とする認識からすれば、桃生柵が造営された場所も地理的にみて律令国家の支配が及ばない「賊地」と見做されていたことは間違いない。

しかるに朝鑑はこれらの地に僅か三年足らずで城柵を造営させており、さらに先の天平宝字四年正月丙寅条では「蝦夷俘囚」もその造営に協力したとある。これらはいずれも朝鑑による「教導」の著しい成果であるが、この教導の中心的なものがまさに大規模に展開された懐柔政策⁵⁶に饗給であつたのではないだろうか。

さらにこの時期には多賀城政庁の大規模な改修が行なわれている点も忘れてはならない。多賀城碑によれば城は天平宝字六年（七五二）に藤原朝鑑によつて「修造」されており、これは近年の発掘調査により明らかにされた第Ⅰ期～第Ⅳ期までのうちの第Ⅱ期にあたるとも確認されている⁵⁷。第Ⅱ期の最大の特徴は政庁の前面に石敷の広場が設けられることであり、また南門の左右に翼楼が取り付けられることなどもその前後に見られない顕著な特徴としてあげられる。このうち石敷施設の性格については解明されていない部分も多いが、これがすでに述べたような天平宝字年間以降の対「蝦夷」政策の中身と深く関わるものであることは想像に難くない。多賀城政庁は創建当初から瓦葺であつたことなどから「蝦夷」支配を念頭においた「外向きの政庁」としての性格が強いことはすでに指摘されているが、それでもⅠ期とⅡ期との構造上の差異は顕著である。国府の政庁は国家理念を体现する場であるとする理解に従えば、第Ⅱ期政庁の持つ独自性はまさに律令国家の「蝦夷」認識と政策の転換を物語るものといえよう。

ところで以上のような「蝦夷」社会に対する積極政策は、八世紀前半の養老～神龜年間を中心に行われた「蝦夷」の百姓化という政策とは明らかに異なる側面を持つものである。この新たな支配政策の背景には、それまでとは別の「蝦夷」認識の存在を想定する必要があるが、おそらくそれを知る上で一つの鍵となるのが『続日本紀』天平宝字二年六月甲辰条に見られる「王民」という概念であろう。同条によればこの「王民」は天平十年（七三八）閏七月十四日勅を引用する形で用いられてい

る表現であるが、まずこの勅はその年代からみても出羽路開削を目的とした大野東人の遠征と関わる政策であることは明らかである。神龜元年の征夷以降初の大規模な「蝦夷」社会への支配拡大策である天平九年の出羽路開削と時期を同じくして、「王民」という身分概念が史料に現れるという事実は、まさにそれが百姓・夷狄（蝦夷）という対立的な理念だけでは捉えられない「蝦夷」認識の変化と連動するものであることを示している。この「王民」については次節において詳論したい。

それと関連してもう一つ指摘しておきたいのが、天平宝字年間における「移風易俗」思想の展開であろう。

『続日本紀』天平宝字元年（七五七）四月辛巳条

勅曰。（中略）其高麗。百濟。新羅人等。久慕聖化。来附我俗。

志願給姓。悉聽許之。其戸籍記无姓及族字。於理不穩。宜爲改正。

右の史料は大炊王の立太子にあたって出された孝謙天皇の勅の一部であるが、ここでは高句麗など朝鮮半島から「聖化」を慕い帰化した者のうち、無姓または族姓という姓としては相応しくない者に対して改姓すべきことが述べられている。伊藤千浪氏⁵⁸はこの改姓を日本独自の姓秩序への組み込みを意図したものとされたが、それに加えてさらに重要なものが、この記事が単なる改賜姓にとどまらず、「我俗」への転化と捉えられている点である。これは同じく『続日本紀』天平宝字元年八月己亥条の

勅曰。安上治民。莫善於礼。移風易俗。莫善於樂。

という記事に端的に表れており、ここからも「諸蕃」の「俗」が天皇の化による移風易俗により「我俗」に転化するという意識が存在したことが知られる。田中史生氏⁵⁹はこの時期の移風易俗思想について、「諸蕃」の俗（蕃俗）も天皇の化に触れることによって「我俗」に馴染むものに变质し取り込まれるという意識によるものと位置付けられたが、このよ

うな意識は「諸蕃」と同じく理念的には「化外」人とされた「夷狄」⁽⁶¹⁾「蝦夷」に対しても同様に存在していたと考えるべきであろう。ただここでも注意しなければならないのが、「我俗」への転化という論理は「蝦夷」の百姓化という法的な論理とは次元を異にするものであるという点である。確かに移風易俗思想は「蝦夷」政策に関しても少なからず影響を与えたと考えられるが、その前提に「蝦夷」社会の持つ異質性と法的支配の限界という律令国家のかなり明確な意識が存在していたことも忘れてはならない。従ってその理念と実際に行なわれた支配政策との間に実際には格差があったとすべきであろう。

⑥陸奥国における「蝦夷」認識の固定化

天平宝字年間が始まる新たな「蝦夷」社会への支配の拡大は伊治城(郡)、桃生城(郡)の造営・建郡という大きな成果をおさめた。しかしこのような動きが結果的に律令国家と「蝦夷」社会との長期的な対立状況に結びつくものであることも知られている。両者の対立が表面化するのには宝龜年間であるが、これ以降の「蝦夷」に対する認識は八世紀前半までの「夷狄」⁽⁶²⁾非百姓集団という認識から、現実存在する列島内の異質な敵対勢力という認識に変化してくる。「蝦夷」関係の史料に「賊」や「敵」という表現が多くなるのは、まさにそのような認識の変化の現れであるといえよう。そこで最後に「蝦夷」社会との対立が表面化する段階における「蝦夷」認識についてまとめてみたい。従来よりこのような大規模かつ長期間の対立は、律令国家による「蝦夷」社会への支配の拡大がもたらした「蝦夷」の抵抗活動であると説明されてきた。もちろんこの理解は実際に行なわれた政策レベルの観点からすればその通りであるが、これに加えて対立が表面化する時期の「蝦夷」認識についてみると、実はここでもその認識を象徴するような事件を確認できる。一つ

は『統日本紀』神護景雲三年(七六九)三月辛巳条にある道嶋宿祢嶋足の請願によるいわゆる一括賜姓⁽⁶³⁾であり、もう一つは神護景雲三年から宝龜元年(七七〇)にかけて行なわれた「俘囚」の大量調庸民化である。ここでは後者について考察する。

(1)『統日本紀』神護景雲三年十一月己丑条

陸奥国牡鹿郡俘囚外少初位上勲七等大伴部押人言。伝聞。押人等本是紀伊国名草郡片岡里人也。昔者先祖大伴部直征夷之時。到於小田郡嶋田村而居焉。其後。子孫爲夷被虜。歴代爲俘。幸賴聖朝撫運神武威。拔彼虜庭久爲化民。望請。除俘囚之名。爲調庸民。許之。

(2)『統日本紀』宝龜元年四月癸巳条

陸奥国黒川。賀美等一十郡俘囚三千九百廿人言曰。己等父祖。本是王民。而爲夷所略。遂成賤隸。今既殺敵帰降。子孫蕃息。伏願。除俘囚之名。輸調庸之貢。許之。

この二つの史料については「俘囚」の發生に言及した際にも触れたが、改めてその内容をまとめると双方とも「俘囚」身分の調庸民化を請願するものとなっている。なおこの史料から「俘囚」が調庸民化⁽⁶⁴⁾百姓(公民)化を期待されていた身分であるとする解釈もなされているが、それは誤りであろう。なぜならこの調庸民化⁽⁶⁵⁾百姓化は以下に述べるように「本是王民」という主張のもとになされているのであり、つまり自らを「俘囚」として認めた上で身分の上昇を要求しているのではない。むしろこれは①節でも指摘したように「俘囚」が身分としては閉塞的な状況に置かれていることを如実に示しており、さらに同様の請願が他に確認されないことから、ここでは二つの請願が行なわれた背景が問題となる。それは表現を変えれば「俘囚」の調庸民化という形で表面化した、辺境地域における「蝦夷」認識ではなからうか。

さて(1)では牡鹿郡俘囚の大伴部押人という人物が「俘囚之名」を除い

て「調庸民」となることを要求している。この史料で従来より注目されてきた点は、現時点での彼は自らが「化民」身分であるという点であり、ここから「俘囚」「化民」という身分的な位置付けがなされていたことを知ることができる。「化民」という表現はここにしか見られないものであるためその性格は不明確であるが、「化」とは教化・徳化の「化」を示すものであるとすれば、広い意味で「化内」の人間であるということとを意味している用語であるとも考えられよう。さらに(2)では実に三九二〇人の「俘囚」がやはり「俘囚之名」を除いて「調庸之貢」を輸すことを請願し受け入れられているが、こちらは前の記事と内容が共通していることからしても、大伴部押人の請願と関連性を持つものであることは明らかである。つまり後者は押人の請願が認められたことをうけた陸奥国における「俘囚」集団の大きな運動として現れたものと理解すべきなのであろう。

ところでこの(2)の記事で注目したのは、俘囚の請願の根拠となつてゐるのが押人のような具体的な出自を示すものではなく、「己等父祖。本是王民」とされている点である。おそらくこれは請願の人数が多いために個別の根拠について記さなかったためであろうが、それらの根拠を集約する表現として「王民」という語が用いられている事実は非常に示唆的である。なぜならこの「王民」は前にも触れた『続日本紀』天平宝字二年六月甲辰条の「王民」という理念の延長線上に位置するものと考えられるからであり、さらに重要なことはこの史料から「王民」が陸奥国の現地社会において「俘囚」(または「蝦夷」との明確な対立的身分概念として用いられていることが読み取れるからである。またそこでは「量給種子令得佃田。永爲王民。以充辺軍。」とあり、種子と田地を支給し、田地の耕営を行なうことが「王民」である条件とされる。これは言うまでもなく律令法の支配理念すなわち班田收授を意味するものと思われるが、ただ本来そのような形で支配の対象となる集団はす

でに繰り返して述べたように「百姓」である。実際八世紀前半の「蝦夷」による建郡請願は百姓身分への上昇がその主眼となつてゐることからすれば、やはりこの「王民」という概念は「蝦夷」に対する認識の変化と関わるものと考えざるをえない。では「王民」と「百姓」の本質的な違いは何であろうか。一言でいえばそれは律令法による身分概念であるか、天皇の人格的な関係によつて規定されている身分概念であるかの違いであるが、吉村武彦氏が論じられるように百姓は王民に包摂される概念であるとすれば、これは支配理念の枠を広げることによる「蝦夷」支配の新たな論理ということになる。つまり「王民」は新たな対「蝦夷」政策を展開するため、律令法の百姓―夷狄(蝦夷)という身分的対立構造の限界を克服し、「蝦夷」を支配・包摂する新たな論理として登場したのではなからうか。⁶⁵⁾

それに対し(1)、(2)の「王民」も本質的には理念的な人間集団であるが、こちらは天平宝字年間から行なわれた「蝦夷」社会への支配拡大政策の中で次第に「蝦夷」あるいは「俘囚」に対峙する身分集団としての性格を強めていったもののように思われる。この記事では請願した三九二〇人の「俘囚」が本来は王民身分であつたかどうかという点も気になるが、この段階において「俘囚」という身分的には特殊な状態にある集団が「本是王民」という明確な自己認識を主張している事実そのものが重要な意味を持つ。「王民」という身分集団も支配権力の理念により生み出された観念的な存在であるが、この二つの史料はその観念的な集団が、「辺境」地域における自己認識運動を通じて実体化する過程を読み取ることができるといふ点に最大の特徴があるといえよう。⁶⁶⁾

それではなぜこの神護景雲三年から宝亀元年にかけて「俘囚」の調庸民化⇨王民化という運動が起きたのだろうか。天平宝字年間から展開された東北政策は伊治郡・桃生郡の建郡、整備に関する記事が大部分を占めるが、それら一連の政策の最終段階にあたるのが神護景雲年間である。

(3) 『統日本紀』神護景雲元年（七六七）十月辛卯条

勅。見陸奥国所_レ奏。即知伊治城作了。自始至畢。不_レ満三旬。朕甚嘉焉。（中略）其外從五位下道嶋宿祢三山。首建斯謀。修成築造。今美其功。特賜從五位上。又外從五位下吉弥侯部眞麻呂。徇国争_レ先。遂令_レ馴服。狄徒如_レ婦。進賜外正五位下。自餘諸軍々殺已上。及諸国軍士。蝦夷俘囚等。臨事有_レ効。應叙位者。鎮守將軍並宜_レ隨_レ勞簡_レ定等第奏聞_上。

(4) 『統日本紀』神護景雲二年（七七八）十二月丙辰条

勅。陸奥国管内及他国百姓。樂_レ住伊治桃生者。宜_レ任情願。隨_レ到安置。依_レ法給_レ復。

(5) 『統日本紀』神護景雲三年（七六九）二月丙辰条

勅。陸奥国桃生。伊治二城。营造已畢。厥土沃壤。其毛豊饒。宜_レ令_レ坂東八国。各募部下百姓。如有情好農桑就_レ彼地利者。則任_レ願移徙。隨_レ便安置。法外優復。令_レ民樂_レ遷。

まず(3)からはすでにこの時伊治城が完成しており、それが築城開始から三年足らずの事業であつたことが知られる。またその造営に「蝦夷俘囚」が参加している点も見落とせない。すでに述べたように桃生城・雄勝城の造営にも「夷俘」が徴発されており（『統日本紀』天平宝字二年十二月丙午条）、伊治城をはじめとする天平宝字年間以降の城柵はこのような「夷俘」集団も動員しているところに大きな特徴がある。ただそれは「蝦夷」「俘囚」の百姓化（公民化）に結びつくものでもなかった。「饗給」など大規模な懐柔策を中心として実現したと思われる当該期の「蝦夷」支配は、実質的な編戸を前提とした「撫慰」（招慰）とは次元の異なるものであり、当然その支配の中身も極めて不安定なものであつたと考えられる。そこでは黒川十郡のような百姓集団の創出も困難な地域であつたことは(4)、(5)からも明らかであり、つまり天平宝字年間以降の建郡は、その地域における人間集団の百姓化を意味するものではないと

ころに八世紀前半の建郡との決定的な違いがある。多賀城碑が記す「蝦夷国」が実態をとまなう認識であることはすでに確認したが、その「蝦夷国」とされた地域への支配の拡大は、八世紀前半の養老・神龜年間に顕在化した「蝦夷」とその地域の百姓化の限界という課題をクリアするものではなかつたことだけは確かであろう。すなわち城柵の造営や建郡が行なわれた桃生・伊治地域（雄勝も同じ）は、その制度的な内国化とは裏腹に、本質的にはそれまでの「蝦夷」社会Ⅱ「蝦夷国」と大きく変わるものではなかつたのであり、またそう認識されていたと思われる。それは神龜元年頃までに東国の百姓集団などを基本的な人間集団として成立した黒川以北十郡とは明らかに異質の地域であつた。⁽⁶⁷⁾

以上の点を踏まえて考えると(1)、(2)の「俘囚」の調庸民化運動は、天平宝字年間から大規模に行なわれた律令国家による「蝦夷」社会への新たな支配の拡大に対応する形で、実際に「蝦夷」社会を認識し、それに接する陸奥国の内部から起こつた「自己認識運動」という性格を持つものであるという解釈を導き出すことができる。しかしここで行なわれた「王民」化の請願は単に在地社会における地位・身分の上昇を示すばかりでなく、むしろ自らを天平宝字年間以降の新たな「蝦夷」支配政策によつて形式的に組み込まれた「夷俘」集団と峻別するという意味をも持つのである。表現をかえればこれはまさに「蝦夷」に対する差別意識の具現化にはかならず、何よりもそれは「俘囚」という中間的・身分集団による運動となつて現れている事実の端的に示されている。またここで重要なのが「王民」という身分概念の実体化であろう。「王民」は百姓という法的な身分規定の限界を越え、「蝦夷」社会への支配の拡大・包摂を実現化するための新たな身分概念であるが、それが大量の「俘囚」の王民化を契機として実体化することにより、現地での「蝦夷」社会に対する差別構造をも現出させることになつたのである。つまり「王民」概念は国家による「蝦夷」社会の支配・包摂という意図とは逆に、現地に

おける人間集団の対立構造を象徴するものとなり、ここにおいて律令国家の「蝦夷」認識は、国家支配層の理念的な次元にとどまらない現実の人間集団に対する陸奥国現地社会の認識として新たな展開をみせることになる。九世紀の史料にしばしば見られる「不諭民夷」という表現の「民」も、以上のような対立認識の延長線上に位置付けられるかなり実態的な人間集団であったと思われる。

九世紀への展望―結びにかえて―

陸奥国における「俘囚」の大量王民化が請願・許可されてから約半年後、次のような報告がなされている。

『続日本紀』宝龜元年八月己亥条

蝦夷宇漢迷公宇屈波宇等。忽率_二徒賊_一。逃_二還賊地_一。差_レ使喚_レ之。

不肯来帰。言曰。率_二一二同族_一。必侵_二城柵_一。於是。差_二正四位上

近衛中将兼相模守勲_二二等道嶋宿祢嶋足等_一。檢_二問虚実_一。

この史料は養老四年・神龜元年の「蝦夷」反乱をのぞけば、「蝦夷」の律令国家からの離反を具体的に示す初見記事である。律令国家と「蝦夷」社会との対立状態は文室綿麻呂の奏言によれば宝龜五年（七七四）から弘仁二年（八一二）の三十八年間であるが、この記事はすでにそのような双方の社会の対立を予期させる内容となっており、その意味では「蝦夷」社会の離反を示す端緒となる重要なものである。宇漢迷公宇屈波宇は有力な「蝦夷」の族長と思われる、彼とその勢力の「逃還」はそれまで「蝦夷」社会への支配拡大を順調に推し進めていた国家側にとって不穏な動きとして警戒されたことは間違いない。⁶⁹ 宇屈波宇の国家支配に対する対立認識は「必侵城柵」という言葉の中に集約されているが、ではなぜ彼はこの時期に律令国家との対決姿勢を明らかにしたのだろうか。そこにはやはり近夷郡（黒川以北十郡）における「俘囚」の調庸民

化⁷⁰王民化という形で明確に表れた「蝦夷」社会との差別化が少なからず影響しており、地域的にも集団的にも「王民」と「蝦夷」の対立構造が表面化したことを宇屈波宇自身が認識したことが直接的な契機となったのだろう。つまり彼の行為は「王民」身分への上昇という「俘囚」の運動とはまったく正反対の自己認識運動として起きたものであり、それは何よりもこの離反が「俘囚」の大量王民化から時を経ずして行なわれているという事実そのものが物語っているといえる。史料には宇屈波宇が「賊地」へ「逃還」したとあることから、彼がそれ以前には賊地ではない地域、すなわち国郡制支配の及ぶ地域に居住していたと推測できる。それが近夷郡であったか、あるいはそれ以北の伊治・桃生郡地域であったかは判断できないが、いずれにしてもそのような地域で宇屈波宇が被差別的な認識を強めていったことは確かであり、これが彼の離反以降、次第に双方の社会における対立認識として増幅されていったと想定したい。

八世紀末から九世紀にかけての「蝦夷」認識を象徴するもう一つの事件は宝龜十一年（七八〇）に発生した伊治公皆麻呂の乱である。ここでは伊治郡の大領である皆麻呂に対し、同じ陸奥国の牡鹿郡大領道嶋宿祢大楯が「毎凌_二侮皆麻呂_一。以_二夷俘_一遇焉。」という差別的な扱いをしていたことが反乱の原因の一つにあげられている。ここで重要なのは、自分は郡司（大領）という律令国家の支配層の一人であるという皆麻呂の認識と、彼をあくまでも「夷俘」として見なす道嶋大楯の認識とのギャップであろう。また大楯が皆麻呂を「夷俘」と認識した背景には、近夷郡（黒川以北十郡）の北は「蝦夷国」であるという八世紀前半以降の「蝦夷」社会に対する地域的な認識が存在していることも指摘できよう。この反乱により律令国家と「蝦夷」社会との対立が決定的になったという感があるが、これまで述べてきたようにその前提には「蝦夷」そのものに対する認識の変遷があったことを考慮しなければならない。国家支配の

最前線における「蝦夷」支配政策とその反動・挫折の繰り返しの中で、理念的な「蝦夷」認識はより具体化・固定化していくのである。九世紀の史料に見られる「異類⁽⁷⁾」という認識は、まさにそのような「蝦夷」認識の到達点を示す表現なのである⁽⁷⁾。

註

(1) 蝦夷についてはさまざまな呼称があるが、それぞれ実態的な側面とともに観念的な要素も持つものであるため、本論文では基本的には史料等に則して「蝦夷」「俘囚」「夷俘」という表記を便宜用いることにする。

(2) このような「蝦夷」に対する認識については最近田中聡「民夷を論ぜず——九世紀の蝦夷認識——」(『立命館史学』十八、一九九七年)が、九世紀の史料を中心に新しい視点から考察を行なっている。田中氏は「蝦夷」という観念的な集団が実体化する過程において、それが「東北の在地社会においてはいかに関連づけられ現実化」するのか、また「公民と蝦夷との間の境界線は、誰によってどのようなプロセスで引かれるのか」「またどのような局面において両者の差異が反復確認されるのか」が問われなければならないと述べられており、筆者も全く同感である。

(3) 「夷狄」≠異民族としての「蝦夷」の成立過程については伊藤循「古代王権と異民族」(『歴史学研究』六六五、一九九四年)が詳しい。

(4) 陸奥・出羽(越後)国のもつ理念的に特殊な構造については武廣亮平「日本古代の『夷狄』支配と『蝦夷』——その儀礼と身分——」(『歴史学研究』六九〇、一九九六年)参照。

(5) 関口明「渡嶋蝦夷と肅慎・渤海」(佐伯有清先生古稀記念会編『日本古代の伝承と東アジア』一九九五年)。

(6) 『新訂増補国史大系』以下引用史料はすべてこれによる。

(7) 伊藤循「蝦夷と隼人はどう違うか」(吉村武彦・吉岡眞之編『争点日本の歴史』3 古代編Ⅱ、一九九一年)。

(8) 今泉隆雄「律令国家とエミシ」(須藤隆・今泉隆雄・坪井清足編『新編古代の日本』9 東北・北海道、一九九二年)。

(9) 山田秀三「アイヌ語地名の研究」一、一九八二年。

(10) 今泉隆雄 前掲註(8)論文

(11) 「蝦夷」に関する具体的な認識を示す記事が八世紀末から九世紀にかけて多くなるのは内国への移配政策が大きな要因となっていると思われる、実際「俘囚」「夷俘」の不服従性を示す史料の多くは内国のものである。

(12) 吉村武彦「古代の社会構成と奴隷制」(『講座日本歴史』2 古代2、一九八四年)。同「律令的身分集団の成立」(『講座前近代の天皇』3 天皇と社会諸集団一九九三年)。

(13) 熊谷公男氏も古代東北における人間集団の実態について「蝦夷系住民」と「非蝦夷系住民」という捉え方をされている(『古代東北の豪族』前掲註(8)書『新編古代の日本』9 東北・北海道、一九九二年)。こちらは今泉氏とは逆に「蝦夷(系)」という人間集団をある程度自明の存在とし、その範疇に属さない集団を「非蝦夷(系)」と理解する点に特徴があるといえるが、これも「蝦夷系住民」の人間集団としての独自性やその自己認識が問題となることは明らかである。

(14) 大塚徳郎「文部・吉弥侯部について」(『歴史』五、一九六四年)。同「みちのくの古代史」一九八四年。志田諄一「毛野氏と同祖と称する氏族とその分布について」(『英城キリスト教短大紀要』四、一九六四年)。佐伯有清「新撰姓氏録の研究」考證編 第二、一九八二年。また君子部の成立年代について、平川南氏は十七条憲法などに見られる君臣概念の成立と深く関わるものとされ、東国における他の部姓者に対しても新しいとされる(「俘囚と夷俘」青木和夫先生還暦記念会編『日本古代の政治と文化』一九八七年)。平川氏が述べられるごとく君子部の成立は七世紀頃まで下ると考えられるが、ただ「君子」という名が君臣概念を承けたものであるという点についてはさらに検討を要する。

(15) この場合の「蝦夷系」人間という解釈については、律令制以前ではどの地域のどのような特質を持つ人間(集団)が「蝦夷」「正統には「毛人」と認識されていたのか定かではないため、その実態を説明するのは非常に困難である。ただ七世紀までの大和王権の支配地域は、『国造本紀』によればたとえ陸奥国地域では阿武隈川以南と考えられており、このような国造制・屯倉制の外側に位置する地域・住人が漠然と「蝦夷(毛人)」と認識されていた可能性はある。その際注目されるのは『日本書紀』崇峻二年(五八九)七月壬辰朔条に「遣近江臣満於東山道使観蝦夷国境」とある「蝦夷国」の存在である。この記事の性格については篠川賢「日本古代国造制の研究」一九九六年が国造制支配から、若月義小「『東国の調』の実態と性質——ミヤケの収取機構との関連で——」(『立命館文学』五二二、一九九一年)がミヤケ支配からそれぞれ言及されており、両氏とも「蝦夷国」をある程度の具体的な地域として理解されている。

(16) 石上英一「古代東アジア地域と日本」(『日本の社会史』一、一九八七年)。熊田亮介「古代国家と蝦夷・隼人」(『岩波講座日本通史』4 古代3 一九九四年)。

(17) 今泉隆雄「八世紀前半以前の陸奥国と坂東」(『地方史研究』二二二 一九八九年)は、七世紀中頃から後半に仙台平野から大崎台地にかけて(1)初期宮衙(郡山遺跡・名生館遺跡)が成立した点、(2)関東からの移民の存在を窺わせる関東系の

土器が出土する点などから、この地域においてすでに律令国家に支配が成立していたとされた。しかしこの段階から、陸奥国のいわば最前線地域において律令制的な支配が行なわれていたとはやはり考えにくい。平野卓治「蝦夷社会と東國の交流」(鈴木靖民編『古代王権と交流』「古代蝦夷の世界と交流」一九九六年)も指摘するように、この時期の東國からの人の移動は有力な首長層がその支配下の人間集団を移住させるという形態のものであり、八世紀以降の国家的な移住政策とは次元を異にするものであると思われる。またかりに律令制的支配が成立していたと想定しても、それがそのまま「蝦夷」の実体化に繋がるものでないことも明らかであろう。

- (18) 今泉隆雄「蝦夷の朝貢と饗給」(高橋富雄編『古代東北史の研究』一九八六年、同 前掲註(8)論文。

- (19) 平川南「陸奥・出羽官衙財政について―いわゆる「征夷」との関連を中心として―」(『歴史』四八 一九七六年)、鈴木拓也「陸奥・出羽の調庸と蝦夷の饗給」(『史学雑誌』一〇五―一六 一九九六年、のち『古代東北の支配構造』一九九八年所収)。

- (20) 伊藤循 前掲註(7)論文。

- (21) 岸俊男「班田図と条里制」(『日本古代籍帳の研究』一九七三年)。

- (22) 田中史生「律令制下における「帰化人」と「復讐」」(『国学院大学大学院紀要―文学研究科』二六、一九九五年、のち『日本古代国家の民族支配と渡来人』一九九七年所収)。

- (23) 今泉隆雄 前掲註(8)論文。同「律令における化外人・外蕃人と夷狄」(羽下徳彦編『中世の政治と宗教』一九九四年。熊田亮介 前掲註(10)論文。同「蝦夷と北の城柵」(小林昌二編『古代王権と交流』「越と古代の北陸」一九九六年)。

- (24) 伊藤循「古代国家の蝦夷支配」(前掲註(17)書『古代蝦夷の世界と交流』、武廣亮平 前掲註(4)論文。これに対し田中史生氏は「蝦夷」は「化外人」であるとしながらも「帰化」を想定された存在ではなかったとされ、「招慰」「撫慰」「饗給」は「蝦夷」を戸貫に附することを目的としてその前段階に行なわれる行為であり、公戸となることを前提とする「帰化」の認定とは明らかに次元の異なる政策であったとされる(「蝦夷と「帰化」」前掲註(22)著書。田中氏の問題提起は、これまでその実態が解明されないまま議論が行なわれてきた「招慰」「撫慰」と「帰化」との本質的な差異を鋭くついたものであり、多くの示唆に富むものといえよう。「招慰」「撫慰」の具体的な内容については今後さらに明らかにしていく必要があるが、本文でも述べたように大宝令段階においては戸令没落外蕃条の「化外人」に「蝦夷」も含まれていたという解釈も可能である。

- (25) 熊田亮介 前掲註(23)「蝦夷と北の城柵」。

- (26) 井上辰雄「熊襲と倭人」一九七八年。中村明蔵「倭人の研究」一九七七年。同「天平期の倭人」(『倭人と律令国家』一九九三年)。

- (27) 平川南「海道・牡鹿地方」(『石巻の歴史』六 特別史編、一九九二年)。

- (28) 工藤雅樹「石城・石背両国の分置と広域陸奥国の復活」(関見先生古稀記念会編『律令国家の構造』一九八九年、のち『蝦夷と東北古代史』一九九八年所収)。

- (29) 熊谷公男「黒川以北十郡の成立」(『東北学院大学東北文化研究所紀要』二一九八九年)。

- (30) 撫慰(招慰)と編戸との関係については、田中史生氏が述べられるごとく撫慰(招慰)＝編戸ではないことは確かであろう(前掲註(24)論文)。撫慰あるいは招慰は編戸という作業を行なうための前提となる行為であり、その内容については明らかではないが、少なくともそれは「百姓化」を目的としたかなり具体的なものであったと思われる。按察使や国司の殺害という形に発展した「蝦夷」社会の抵抗は、撫慰が単なる衣食の支給や賜宴などの懐柔策ではないことを物語っているのではなからうか。

- (31) 伊藤循「律令制と蝦夷支配」(田名網宏編『古代国家の支配と構造』一九八六年、同 前掲註(24)論文)。

- (32) 和銅三年の「蝦夷」への君姓賜姓は、その年の正月に新都平城京で行なわれた元日朝賀への「蝦夷」の参加が関連していると思われる。和銅三年の元日朝賀については武廣亮平「元日朝賀と蝦夷―八世紀における蝦夷の服属儀礼に関する一考察―」(『古代史研究』一〇、一九九一年)参照。

- (33) 鈴木拓也 前掲註(19)論文。

- (34) 熊田亮介 前掲註(16)論文。

- (35) 石母田正「古代の身分秩序」(『日本古代国家論』第一部 一九七三年)。

- (36) 吉村武彦 前掲註(12)論文。伊藤循 前掲註(31)論文。

- (37) 「俘囚」を中心とする「蝦夷」の移配については関口明「八、九世紀における移配蝦夷の実態」(『日本歴史』三五七、一九七八年)。同「蝦夷と古代国家」一九九二年。高橋崇「律令国家東北史の研究」一九九一年。平川南 前掲註(14)論文。武廣亮平「エミシの移配と律令国家」(『千葉歴史学叢書』「古代国家と東国社会」一九九四年)。

- (38) 西郷信綱「アヅマとは何か」(『古代の声』一九八五年)。

- (39) 西山良平「古代国家と地域社会」(『日本の古代』十五 古代国家と日本、一九八八年)。

- (40) 律令国家成立以前においても「蝦夷」を王権の守護的存在として扱ったものとして『日本書紀』景行五十一年条に見られる佐伯部の起源説話がある。ただこれは「倭人」や「東人」に対して課せられた王権の守護と同様の性格を持つものであり、「蝦夷」に限定された特別な認識の表象とみるべきではない。

- (41) 「蝦夷」と「俘囚」の実質的な違いとして、近年では「蝦夷」は地縁関係を維持したまま律令国家との政治的関係を結んだ集団であり、それに対して「俘囚」は地縁関係を失った集団であるとする理解（古垣玲「蝦夷・夷俘と俘囚」『川内古代史論集』四一九八九年）が一般的である。その一つの理由として「俘囚」の多くが「吉弥侯部」という地縁性のない姓を持つことがあげられているが、律令国家の百姓（公民）身分の姓の大部分が部姓であることも考慮すれば、これが地縁性の有無を論じる根拠となりえないことは明らかであろう。またさらに姓については「蝦夷」は君姓であるという特徴も認められ、これはカバネとしての「君」が独立性の強い在地首長に対して付されたという前代の認識を受け継いだものと理解できよう。
- (42) 平川南 前掲註(14) 論文。
- (43) 伊藤循 前掲註(24) 論文。
- (44) 熊谷公男 前掲註(29) 論文。
- (45) 今泉隆雄「名生館遺跡と県北の支配」(『図説宮城県の歴史』一九八八年)は黒川以北十郡の成立を霊亀元年の移民の直後とされる。
- (46) 「近夷郡」については熊谷公男「近夷郡と城柵支配」(『東北学院大学論集』歴史学・地理学二、一九九〇年) 参照。
- (47) 多賀城碑については安倍辰夫・平川南編「多賀城碑―その謎を解く―」一九八九年により、その信憑性が高いことが明らかにされている。
- (48) 伊藤循「多賀城碑の『国界』認識と天皇制」(『歴史評論』五五五、一九九六年)。
- (49) 伊藤循氏もこの「蝦夷国界」を化内と化外の境界であったとされる(前掲註(48)論文)。なお武廣亮平 前掲註(4)論文では、多賀城碑の「蝦夷国」を令制前における「蝦夷」の独立的な「国」の遺制であるとしたが、この点については見解を改めたい。
- (50) さらにこの時期における「蝦夷」認識の具体化を窺い知るものとして「詠語人」の存在をあげることができる。『続日本紀』養老六年(七二二)四月丙戌条では 征討陸奥蝦夷。大隅薩摩隼人等 將軍已下及有功蝦夷。並譯語人。授勲位。各有差。
- とあり、「蝦夷」社会の言語が通訳を必要とする明らかに異質なものであるという認識を確認できるのもこの養老年間である。
- (51) 平川南「東北大戦争時代」(『古代の地方史』六 奥羽編、一九七八年)。
- (52) 平川南 前掲註(14)論文。平川氏は「夷俘」とは「俘囚」身分と在地での支配を容認された「蝦夷」とを包括する概念として登場したものであるとされる。
- (53) 城柵における「俘囚」などいわゆる「蝦夷系住民」の支配形態については熊谷公男 前掲註(46)論文。今泉隆雄 前掲註(8)論文参照。
- (54) 小林隆「律令制下の化内・化外人について」(『新しい歴史学のために』二二二、一九九三年)。
- (55) 関口明「古代東北における建郡と城柵―出羽国雄勝郡を中心に―」(『続日本紀研究』二〇二、一九七九年)。
- (56) 「賊地」の理解については必ずしも未支配の地を意味するものではなく、古代国家との間に政治的な関係をもったものが離反・蜂起した所産であるという解釈も見られる(熊田亮介「蝦夷と古代国家」『日本史研究』三五六、一九九二年)。
- (57) 多賀城跡調査研究所「多賀城跡 政庁本文編」一九八二年。
- (58) 阿部義平「古代城柵政庁の基礎的考察」(『考古学論叢』一九八三年)。
- (59) 伊藤千浪「律令制下の渡来人賜姓」(『日本歴史』四四二、一九八五年)。
- (60) 田中史生「律令国家と『蕃俗』―渡来人氏族の姓と出自の問題―」(林陸郎・鈴木靖民編『日本古代の国家と祭儀』一九九六年、のち前掲註(22)著書所収)。
- (61) 平川南 前掲註(14)論文。平川氏は姓の観点から天平宝字元年の渡来人賜姓が「夷姓」に与えた影響を指摘される。
- (62) 神護景雲三年のいわゆる一括賜姓については熊谷公男 前掲註(13)論文。鈴木啓「神護景雲三年の一括賜姓」(小林清治先生還暦記念会編『福島地方史の展開』一九八五年)をはじめとして多くの研究がある。この一括賜姓を中心とする陸奥国の改姓運動も「蝦夷」認識の問題と密接に関連するものであるが、これについては機会を改めて論じたい。
- (63) 熊谷公男 前掲註(46)論文。
- (64) 吉村武彦 前掲註(12)「律令的身分集団の成立」。
- (65) これ以前の史料にも陸奥、出羽国における「蝦夷」「俘囚」に対する集団概念として「百姓」「皇民」などの表現が見られる。このうち「皇民」については吉村武彦氏は王民と同一の概念であるとされるが(前掲註(64))、たとえば前にも紹介した『続日本紀』和銅五年(七二二)九月己丑条の出羽建国記事には 其北道蝦狄。遠憑阻險。實縦狂心。屢驚邊境。自官軍雷擊。凶賊霧消。狄部晏然。皇民無擾。誠望便乘時機。遂置二國。式樹司宰。永鎮百姓。奏可之。於是始置出羽國。
- とあり、この場合の「皇民」は文意からみて百姓と同じものである。またここからは「皇民」が「蝦狄」に対峙する集団であるという現実的な集団認識を読み取ることができる。
- (66) なお『日本書紀』大化二年(六四六)八月癸酉条にいわゆる品部廃止詔にも「王民」の語が見られる。ただこれが『続日本紀』宝龜元年四月癸巳条の「王民」と同一概念であるのかという点については改めて検討が必要であろう。

- (67) 鈴木拓也「古代陸奥国の軍制」『歴史』七七、一九九一年、のち前掲註(19)
著書所収も、栗原(伊治)・桃生以北の諸郡には軍団の創出を可能にする公民制
が充実しなかった点を指摘される。
- (68) 田中聡氏も八世紀後半には「夷」と「民」との自己認識をめぐって「蝦夷」社
会の内部でも対立が生じ、また「夷」であり続けるか、「民」となるかの主体的
な選択が律令国家や他の蝦夷との政治的関係を(一時的にせよ)決定する場合が
あったとされる(前掲註(2)論文)。
- (69) 「蝦夷」の有力族長である宇漢米公の動向については弓野正武「蝦夷の族長に
ついての一考察」『民衆史研究』十二、一九七四年)に詳しい。
- (70) 熊谷公男氏は宇漢米公宇屈波字が「近夷郡」に移住していたとされる(前掲註
(46)論文)。
- (71) 『続日本後紀』承和四年(八三七)四月癸丑条
- (72) このような認識の変遷が出羽国でも認められるのかという点については現段階
では明らかではないが、陸奥国の動きと何らかの形で連動すると考えるのが妥当
であろう。これについては今後の課題としたい。

(道都大学教養部、国立歴史民俗博物館特定研究協力者)

(一九九九年七月六日 審査終了受理)

Cognition of “Emishi” in the Eighth Century and its Change

TAKEHIRO Ryohei

Japanese legal system established in the eighth century and it defined “emishi” as *iteki* rank, as population who was not subjugated by the central government. As the state promulgated various anti-emishi policies, the cognition of emishi would have changed through time. This paper discusses the changes in the cognition of emishi especially in the Mutsu province in the eighth century.

Although the civil and penal codes defined the emishi as aliens, the government had considered that emishi could be incorporated into Japanese society. Thus the anti-emishi policy during the Taiho legislation was relatively mild in order to facilitate their Japanization. This policy lasted until the early eighth century.

When emishi resisted the Japanese control and provoked riots, the government abandoned the Japanization policy. Instead it established a new tax-exempted rank called *fushu* to include the emishi, and set up new frontier counties for emishi to reside. The cognition of emishi as non-subjugated group prevailed until the ninth century.

Succeeding anti-emishi policy returned to facilitate their obedience to the government. It attempted to japanize emishi but never fully accomplished. The discrimination against emishi gradually accumulated among people in the frontiers since emishi was tax-exempted as the *fushu* rank. The discrimination and suppression against emishi solidified the cognition of emishi as non-subjugated aliens in the ancient Japanese society.